

【タイトル】在宅訪問薬剤師を10年やってみて～年間プレアボイド数80件に至るまでの道のり～

【目的】薬剤師の在宅業務の中でそこに至るまで、10年間の在宅業務経験を踏まえて報告する。

【背景】訪問開始当初、沖縄での薬剤師の在宅訪問業務を行っている所は皆無に等しく、訪問看護師が処方薬のカレンダーへのセット等、薬剤管理の代行を行っているケースが多かった。その様な状況で当初、訪問看護師から薬剤師の訪問について『薬を配達セットするだけ』と誤解され、必要ないと言われるケースも少なくなかった。そこで、薬の専門職である薬剤師が在宅で薬剤管理をする意義について、患者様の現在の病状に現処方薬がマッチングしているか、適正使用、副作用確認、服薬のスリム化観点から処方提案を行う事こそ重要では無いかと言う結論に至った。処方提案する事を軸とした薬剤管理を行う事で、最近5年間は薬局での訪問業務をチーム分担した上で約100名の患者を担当し、年間60～80例のプレアボイド症例数を数える迄に至った。結果、患者様、ご家族は基より、担当医、訪問看護、ケアマネージャー等他業種からも評価頂き、訪問医からは基より当初抵抗のあった訪問看護師からの訪問依頼を常時頂ける様になった。多職種連携の構築の礎ともなっている。

【考察】本発表では、過去2年間の間にプレアボイドとなった処方提案内容の分類や、プレアボイド率から、どういった提案が担当医に承諾され易かったかを分析した。その結果、便秘、薬剤減量、用法変更(仮)の順でプレアボイドとなった事例が多い事が分かった。また、処方提案を常時した結果、実質年間の休日や、夜間緊急対応件数が1-2回(以前は10回以上)と激減するに至った。この事よりプレアボイドに至る処方提案を行う事は、患者様の病状軽減や改善、副作用防止に役立つと共に、担当医等、多業種とのパートナーシップの構築、更には訪問薬剤師の疲弊の軽減に繋がる事が示唆された。

【目的】

2008 年より訪問業務に特化した訪問薬剤師として活動を開始し、人口 10 万人あたり薬剤師が少ない沖縄県においても訪問業務の質を担保するために他職種や薬局スタッフとの連携を図り業務を行なっている。今回、これまで 10 年間継続している訪問業務について報告する。

【方法】

薬剤師が訪問業務として薬剤の適正使用、副作用確認、服薬の簡素化、365日緊急時の対応等、専門性を生かした在宅薬剤管理を実践した。実践するにあたり医療事務スタッフの育成と業務改善を行い、積極的に処方提案や他職種との連携を図った。また過去2年間でプレアボイドとなった処方提案内容の分類や、プレアボイド率から、どういった提案が担当医に承諾され易かったかを分析した。

【結果】

訪問業務をチーム分担した上で約 100 名の患者を担当し、年間平均 80 例のプレアボイド症例を集積した。便秘、薬剤減量、用法変更の順でプレアボイドとなった事例が多い事が分かった。また積極的に処方提案を行った結果、休日、夜間緊急対応件数が 1 - 2 回/年と激減した。

【結論】

当初、他職種から薬剤師の訪問について『薬を配達するだけ』と誤解されるケースが少なくなかった。そこで、薬剤師が患者の処方薬の妥当性を適正使用、副作用確認、服薬の簡素化と言う観点から評価し積極的に処方提案を行い、プレアボイド事例を集積することで患者、家族だけでなく他医療種、介護職からも評価され、当初抵抗のあった訪問看護師からの訪問依頼を頂ける様になった。また、訪問業務での疲弊抑止にもなった。つまり薬剤師の参画が患者の病状軽減や改善、副作用防止に役立つと共に、担当医等、多業種とのパートナーシップの構築に繋がると考える。

全700文字